

大学生の初対面会話における呼びかけ表現とその言語行動に関する日韓対照研究

金, 兌妍
九州大学大学院地球社会統合科学府

東出, 朋
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/4752550>

出版情報：地球社会統合科学. 28 (2), pp.16-23, 2022-01-31. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：(c) 2022 Kim Taeyoun, Higashide Tomo

大学生の初対面会話における呼びかけ表現とその言語行動に関する 日韓対照研究

金兌妍・東出朋

Calling Expressions and their Linguistic Behavior in College Students' First Conversation:
Contrasting Japan and Korea

Kim Taeyoun, Higashide Tomo

キーワード：初対面会話、呼びかけ表現、大学生、日韓対照

1. はじめに

我々は聞き手を呼ぶ際に何らかの呼びかけ表現¹を用いる。通常、聞き手を呼ぶという行為は、複数の人がいてその中の一人を特定する場合や注意喚起のために行われる。聞き手を何と呼ぶかは、聞き手との関係が始まる初対面会話で決まることが多く、通常、会話参加者らはお互いの名前や年齢などの聞き手に関する情報を確認し呼びかけ表現を決める。本稿は、日本人大学生と韓国人大学生が、初対面会話場面で聞き手の呼びかけ表現をいかに決定し、それをいつ、どのように用いるかという言語行動について対照分析したものである。

2. 先行研究

本節では、大学生による日韓の呼びかけ表現の分析にあたり、大学生の呼称の形式とその選択要因、呼称の使用頻度、そしてポライトネスとしての呼称に関する先行研究を示す。

まず、本稿の分析対象者である大学生の呼称に関する研究を挙げる。以下に示す2つの研究からは、日本語、韓国語ともに上下と親疎の要因が呼称の選択に大きな影響を与えていることが分かる。日本人大学生の呼称の使用実態に関する研究としては劉寧(2016)がある。劉は、上下、親疎、性別という3つの要因についてアンケートを用いて呼称を調査した。その結果、先輩に対しては親疎より上下の要因が、同級生に対しては親疎が、後輩に対しては上下、親疎、性別の3つの要因全てが、呼称選択へ影響していると述べた。まとめると、先輩に対しては上下が、同級生や後輩に対しては親疎が影響すると言えるだろう。一方、韓国人大学生の呼称の実態に関する研究には林炫情・玉岡(2011)がある。林炫情・玉岡は、先輩に対する親族名称と実名の呼称の適切性判断について、親疎、話し手の性、話者間の性別、場面という4つの要因を設定し、アンケートを用いて諸要因の階層性を分析した。その結果、親族名称の使用には親疎と話し手の性の要因が大きく影響しており、特に親しい関係で話し手が女性の場合に最も肯定的に判断されており、相手との距離を縮めるために用いられていると分析した。一方、実名の使用には場面と親疎の要因が大きく影響し、フォーマルな場面で相手と距離を取るために用いられていると分析した。2つの研究からは日韓の呼びかけ表現の選択要因の違いが明らかになった。しかし、アンケート調査は言語の使用意識を反映しており、言語の運用実態を反映しているどうかは確認する必要があるだろう。

次に、大学生の呼称の日韓対照研究を示す。以下の日韓対照研究からは、日本と韓国で呼び方が異なることが明らかである。洪珉杓(1997)は、大学生同士が用いる呼称についてアンケートで親疎と性差の要因を調べた。その結果、親しくない関係において、日本人大学生では先輩に対しては主に「姓+さん」、同級生と後輩に対しては主に「姓+さん」と「姓+くん」が選択された。一方、韓国人大学生では先輩に対しては「(名前+) 언니(お姉さん)」と「(名前+) 형(お兄さん)」という親族名称、同級生と後輩に対しては「名前+아(야)」が多く選択された。また이영주(2010)も、大学生の呼称の使用実態についてアンケートを用いて親疎と性差の要因を分析している。その結果、聞き手の呼び方については洪珉杓(1997)の結果とそれほど違いはなかった。大きく異なる点として、韓国人大学生の場合、親密度が低いほうが高いより呼称の省略が増えることが指摘された。一方、日本人大学生の場合、親しい人でも親しくない人でも呼称を省略すると答えた人は少なかった。しかし、日本人大学生のこの結果は、本稿の結果とは大きく異なることを後に示す。

呼称を用いる頻度については、日本語より韓国語でその頻度が高いとされている。ファンからスポーツ選手に対する呼びかけ場面と夫婦の会話場面の日韓対照研究からは、韓国語では日本語より多様な種類の呼びかけ表現を用い、その頻度も高いという(尹秀美, 2007; 2008)。

呼称はポライトネスの調整機能も持つ。元知恩(2018)は、ドラマのシナリオを用いて、ポジティブ・ポライトネス、つまり距離を縮める機能を果たす日韓の呼称を比較、検討した。その結果、日本語では氏名の類や人称代名詞が相対的に多用されるのに対し、韓国語では人の特徴などを表す名詞類と疑似親族名称が多く使われていた。疑似親族名称が使える場面は日韓で同じであるのに対し、使える対象は韓国語のほうが広く、それゆえ使用数も韓国語のほうが多い。疑似親族名称は基本的にはくだけた場面で非常に親しい相手に対して用いられていることから、親しくない相手に対して親近感を示して距離を縮める機能を果たすと説明している。また、呉恵卿(2013)は接客場面で店員が客を呼ぶ際の呼びかけ表現に多様な役割があることを明らかにした。韓国語では「손님(お客さん)」「고객님(顧客様)」「언니(お姉さん)」などが使用され、フィラーや発話権の取得、感情表出などの談話標識機能を持つ。また、呼びかけ表現の繰り返しによって談話にリズムを持たせたり、呼びかけ表現の変化と同時にスタイル・シフトが戦略的に行われたりする。一方、日本語では韓国語のような現象は見られないという。韓娥凜(2017)は、日韓の街頭演説での呼びかけ頻度について分析した。その結果、韓国人政治家の方が日本人政治家より国民に呼びかける頻度が高かった。また、韓国人政治家は、国民への待遇や親和関係を構築するために積極的に呼びかけ表現を用いる一方、日本人政治家の演説からはこのような効果は見られなかったと述べた。これらの研究は様々な場面について日韓対照し、日本語に比べて韓国語で呼びかけ表現の使用が多いことを明らかにしている。韓国語の呼びかけ表現は日本語のそれが持たない談話効果を備えているためと言える。

本稿が大学生の初対面場面を選んだ理由は、第一に、初対面場面の分析の知見は言語教育に資すると考えるからである。多くの場合、言語学習者は目標言語で音声コミュニケーションをとることを目指す。目標言語の話者と「初めて」出会う際に相手をいかに呼ぶか、いつ呼ぶか、またその呼ぶ行為が意味することについて、教育現場で提示しておく必要があるだろう。第二に、データには自然談話を用いる必要があると考えるからである。会社員同士や見知らぬ人同士の初対面場面の発話データを収集することは、現実的には非常に難しい。一方、ドラマや小説などのフィクションの媒体を用いれば、初対面場面における呼びかけ行動を収集することは可能ではあるが、自然談話における呼びかけ行動の調整とは大きく異なると予想される。従来の研究では、呼びかけ表現を明らかにするために主に意識調査が行われてきたが、本稿では実態を観察することで実際の言語行動を述べるとともに、先行研究の結果と実際の異同についても明らかになると考える。

3. 分析データと分析方法

分析データは奥山(2004)の大学生2者間(同性)の40分間の会話で、日本語会話が16組(男性9組、女性7組)、韓国語会話が26組(男性14組、女性12組)である。参加者はインターネットで応募し、話題は指定されなかった。会話が行われた場所は日本(福岡、東京)と韓国(ソウル)の大学の研究室で、会話する2人の間に録音機器を置いて録音された。本稿ではその録音の文字化資料を用いて呼びかけ表現について分析した。

分析方法は、文字化資料から、まず名前、学年、年齢などの個人情報の確認の有無と聞き手に対する呼びかけ表現の使用を抽出した。その後、聞き手を呼びかける際の日韓の言語行動の共通点と相違点を観察した。

4. 分析結果

分析の結果、日本語会話では聞き手に呼びかけたり言及したりする言語行動がほとんど見られなかった。韓国語会話では、女子大学生同士で聞き手に呼びかけたり言及したりする場面が多く見られた。日本語と韓国語の呼びかけ表現とその際の言語行動について明らかになった点として、以下の3点が指摘できる。

4. 1 個人情報の確認作業と呼びかけ行為の関係

表1 呼びかけ表現を用いるために必要な情報の確認有無と呼びかけ表現の使用状況ⁱⁱ

	上下確認	名前確認	呼びかけ	言及
JM	100% (9/9)	78% (7/9)	0% (0/9)	22% (2/9)
JF	100% (7/7)	86% (6/7)	0% (0/7)	0% (0/7)
KM	100% (14/14)	50% (7/14)	0% (0/14)	36% (5/14)
KF	100% (12/12)	75% (9/12)	67% (8/12)	67% (8/12)

日本語会話と韓国語会話の共通点としては、全ての組でお互いの上下は確認したものの、名前は確認しないことがあった点が指摘できる。しかし、日本語会話では上下の確認と名前の確認を行ったにもかかわらず、その情報をもとに呼びかけ表現を実際に用いることはほとんどなかった。これは、日本語母語話者は呼びかけの使用をできるだけ回避するという先行研究の指摘(水野, 1999ほか)と一致する。一方、韓国語会話では、聞き手の年齢や学年を確認した後に上下に関する情報をもとに呼びかけ表現を用いる場面が見られたのに対して、名前を確認した会話では名前を用いて聞き手に呼びかけることはなかった。洪珉杓(1997)は名前を伴う親族名称と伴わない親族名称による形式が用いられると指摘したが、本稿のデータでは名前を伴わない親族名称のみの形式が使用されていた。上下確認と名前確認の会話を以下に示す(会話1、会話2)。

【会話1】

JF2A: こんにちは. よろしくお願ひします. 名前を聞いてもいいですか?
 JF2B: はい. JF2Bです.
 JF2A: JF2Aです.
 JF2B: JF2Aさん.
 JF2A: はい.
 JF2B: いくつですか?
 JF2A: 私20歳です. いくつなんですか?
 JF2B: 私は18です.
 JF2A: 全然そんな風に見えない.

日本人大学生のJF2AとJF2Bは、初対面で互いの名前と年齢を確認した。JF2AはJF2Bに「名前を聞いてもいいですか?」と質問し、JF2Bの名前が明らかになった。その後、JF2Aも自分の名前を言った。年齢については、先にJF2Bが先に質問し、JF2Aが回答しつつさらに質問することで、お互いに明らかになる。

【会話2】

KF6A: 어 안녕하세요. (こんにちは.)
 KF6B: 안녕하세요. (こんにちは.)
 KF6A: 예. 저는 제 소개부터 하겠습니다. (はい. 私は私の紹介からします.)
 KF6B: 네. (はい.)
 KF6A: 저는 I 학과 D대 I 학과 2 학년에 KF6A 라고 합니다. (私はI学科D大学2年生のKF6Aと言います.)
 KF6B: 전 B 대학교 I 학과 3 학년 KF6B 라고 합니다. (私はB大学I学科3年生のKF6Bと言います.)
 KF6A: 콧? (グァク?)
 KF6B: KF6B. (KF6B)
 KF6A: KF6B요? (KF6Bですか?)
 KF6B: 권씨요. (グォンです.)
 KF6A: 권씨요? (グォンさんですか?)

KF6B: 네. (はい.)

<中略>

KF6A: 언니 그러면 칠…칠육년 생인가? (お姉さん、そうしたら7…76年生まれなのかな?)

KF6B: 칠칠.. (77年生)

KF6A: 칠칠년이요. (77年生です.)

KF6B: 칠팔이에요? (78年生ですか?)

KF6A: 예. (はい.)

韓国人大学生のKF6Aは、自分の学年や名前を自己紹介の形式で明かす。その後、KF6Bも同じ形式を用いた。その後、名前の詳細や生まれた年についても確認している。

日韓両言語の会話では、ともに聞き手の年齢や名前を確認する際に、会話1のように質問による方法と会話2のように自己紹介による方法が見られた。確認方法については同じだが、韓国語会話では年齢に関する情報を複数質問する場面が存在した。

4. 2 上下に基づく呼びかけ表現の明示的な確認

多くの韓国語会話で、聞き手との関係が同等なのか上下なのかを明示する発言が観察された。例えば「형이네요? (お兄さんですね)」「동갑이네요? (同じ年ですね)」という発言である。その後、上位者に対しては「언니(お姉さん)」「형(お兄さん)」という親族名が、同等・下位者には人称代名詞「너(あなた)」が用いられた。一方、日本語会話では呼びかけ表現について明示的に確認する発言は一切なかった。以下では韓国語の会話例のみを示す(会話3)。

【会話3】

KF12B: 몇 년생이세요? (何年生ですか.)

KF12A: 저 78이요. (私78年生まれです.)

KF12B: 예에…전 76이거든요. (はい. 私76年生まれなんですけど.)

KF12A: 어…언니네요? (あ…お姉さんですね?)

<中略>

KF12B: 어…딱보면 다 막내 같던데. (あ…パッと見たらみんな末っ子ばいって.)

KF12A: 아니야…보이지 않는 곳에서… 내가 독심술을 좀 하질랑. (いや…見えないところで…私が読心術をちょっと持っているんだ.)

KF12B: 언니는→? (お姉さんは?)

KF12A: 나는 셋째야. (私は3番目だよ.)

KF12B: 언니는 남자친구 있어요? (お姉さんは彼氏いますか?)

KF12A: 남자친구 많지. (男の友達なら多いよ.)

KF12B: 사귀는 사람→? (付き合っている人→?)

KF12A: 남자친구야 되게 많지. (男の友達ならたくさんいるよ.)

KF12B: 언니 이쁘니까 많이 있을 것 같애. (お姉さん、可愛いからたくさんいるような気がする.)

KF12A: 너 지금 초면부터 막…내이름 뭔지 기억해? (あなた、今初対面からそんな…私の名前何だったか覚えてる?)

KF12Aは1978年、KF12Bは1976年生まれで、KF12Bの年齢が上であることが明らかになった。KF12AはKF12Bに対して「언니네요? (お姉さんですね)」と述べ、聞き手が年上であることを明示的に確認した後、「언니(お姉さん)」という親族名称で呼び続けた。

4. 3 呼びかけ表現の種類と使用の違い

2人の会話では、一方が話し手の場合もう一方は聞き手であることは双方が了解しているため、あえて呼びかける必要性は低いと一般に考えられる。日本語会話では、聞き手に呼びかけたり言及したりすることはほとんどなかった。韓国語会話でも、日本語会話のように、一度も聞き手に呼びかけたり言及したりしない会話もあり、それは特に男性同士

の会話が多かったⁱⁱⁱ。しかし、韓国語会話では、聞き手に呼びかける必要性が低いと思われる場面であえて使用される例も見られた。その場合、「언니 (お姉さん)」「형 (お兄さん)」「너 (あなた)」が用いられた。ただし、尹秀美 (2007、2008) の結果では多様な種類の呼びかけ表現が見られたのに対し、本稿の結果では聞き手に対する呼びかけ表現は1種類しか見られなかった。このような結果の違いは、会話の場面と聞き手との関係が異なることが原因であると推測できる。なお、韓国語の呼びかけ表現の使用頻度が日本語より高いという結果は先行研究と一致する。呼びかけ表現が用いられた韓国語会話と呼びかけ表現が用いられていない日本語会話を示す(会話4、会話5)。

【会話4】

- ① KF8B: 선생님아 틀려서 그런가봐 (어) <짧은침묵> 너 땀 많이 안 나는 편이지? (先生が異なるからそうかも (あ) <短い沈黙> あなた、汗たくさんかかない方だね?)
- KF8A: 아니예요. 되게 많이. 아까 전에 여기 교수님들 봤거든요. 근데 딱 들어가야 되는데. 너무 땀을 많이 흘려가지고 화장실에서 막 닦고 왔어요 (어) 내 친구는 손만 씻었는데. 나는 얼굴 다 닦았어요. 땀 되게 많이 흘려요. 한번 움직이는데. (いいえ. 本当にたくさん. さっき、ここに大学の先生たちに会ったんですよ. でもすぐ入らないといけないのに. 汗かきすぎてトイレで全部ふいて来ました. (あ) 私の友達は手だけ洗ったのに. 私は顔を全部ふきました. 汗たくさんかきます. 一回動くことが.)
- KF8B: 가끔 움직이기가 싫어. 아까전에 우산 가져왔어? 아까 비 오는 거 같던데. (たまに動きたくないの. さっき傘持って来た? さっき雨降ってた気がするんだけど.)
- KF5A: 이상하게 요즘엔 장마. 비를 꼭 맞아요. 항상. 딱 나오면 비가와요. (おかしいことに最近は梅雨. 雨に必ず降られます. いつも外に出たらちょうど雨が降ります.)
- ② KF8B: 비 되게 많이 오지 않냐? 너 비 오는 날 좋아해? (雨たくさん降ると思わない? あなた雨の日好き?)
- KF8A: 아니요. 나 학교 안가. (いいえ. 私、学校行かない.)
- KF8B: <웃음> 비 오는 날 되게 싫어해. 되게 싫어. (어) 어제는 비 맞고 들어갔는데 집에 갈때. (어) 몇시에 들어갔어? <웃음> (<笑> 雨降る日、本当に嫌い. 本当に嫌い. (あ) 昨日は雨に濡れて帰ったんだけど、家に帰る時. (あ) 何時に帰った? <笑>)
- ③ KF8A: 언니. 언니 혈액형이 뭐예요? (お姉さん. お姉さん血液型は何ですか?)
- KF8B: O형. (O型)
- KF8A: O형. (O型)
- ④ KF8B: 너는? (あなたは?)
- KF8A: B형이요. (B型です.)
- <中略>
- KF8A: 근데 막 교수님들이 가는 게 신상에 좋을 거다 이 말 한마디 딱 하면 애들이 다 가야 되고. (でも教授たちが行ったほうがいいとこの一言をいうとみんな行かないといけないし.)
- ⑤ KF8B: 어. 니네는 그니까 과에서 학생들 다 장려하는 분위기네. (うん. あなたのところではだから学科で学生みんなに奨励する雰囲気なんだね.)

KF8Bは、話題を変える質問をする際に年下のKF8Aを①「너 (あなた)」と呼んでいる。また、雨の話題から聞き手に雨の日が好きかどうかを質問する際にも、再び②「너 (あなた)」によって言及した。KF8Aが年上のKF8Bに対して③「언니」という呼びかけ表現を用いているが、これも話題を変える質問をする際に用いられた。また、KF8BはKF8Aに対して④「너는? (あなたは?)」という呼びかけ表現を用いて同じ質問で聞き返したが、日本語では呼びかけ表現を用いて聞き返す場面はなかった。つまり、韓国語会話では、話題を変えるときや相手が話した内容についてより詳細な質問をするときに呼びかけ表現が用いられやすい。また、相手が話した内容に共感や理解を示す時も呼びかけ表現が用いられる。⑤「니네는~~~」では、KF8Aの意見に対してKF8Bが理解を示しながらコメントをしている。

韓国語で目の前の聞き手をわざわざ呼ぶ言語行動は、韓娥凜 (2017) の指摘のように、聞き手への親密さを表すためだと考えられる。また呉恵卿 (2013) によると、聞き手に呼びかける言語行動はフィラーや発話権の取得、感情表出という機能や談話全体にリズムを持たせる効果があり、韓国語母語話者が目の前の人を呼ぶ行為は戦略的に行われるとも解釈できる。

【会話5】

JF7A: いいね、バイトやってちゃんと北海道に行くという目標があって、今日とかかもしれないけど.

JF7B: 両方行きます.

JF7A: あ、両方行くのか.

JF7B: そのために頑張るんです! まあ、なんとかたまりそうかな.

JF7A: 京都行ったことある?

JF7B: ないです.

JF7A: 私もね、初めて3年生の時に行って、よかったよ.

JF7B: よかったですか. 私、中国地方と九州しか行ったことがないです. 北海道は1回、修学旅行で行ったんですけど

JF7A: 修学旅行、北海道なんだ. スキー?

JF7Aは、旅行の話題から派生して、「京都行ったことある?」という質問をする。韓国語会話なら、このような質問の時に呼びかけ表現を用いることもできると推測されるが、日本語会話では呼びかけ表現を用いる会話はなかった。つまり、「あなたは〜」や「〇〇さんは〜」という言及は一切見られず、回避していると言える。これは第一に、日本語では「あなた」などの対称人称詞の使用に人間関係の制約があり同等関係では使用が困難なため、第二に、呼びかけたくても一度尋ねた名前を覚えていないためと考えられる。

5. 考察

日本語の自然談話では一般に呼びかけ表現を避ける傾向にあるという指摘(水野, 1999; 水谷, 2015; 東出, 2020)の通り、初対面場面でも呼びかけ表現の使用が避けられていることが見てとれた。一方、韓国語の初対面場面では「언니(お姉さん)」や「형(お兄さん)」、「너(あなた)」という上下に基づいた呼びかけ表現の明示的な確認とその使用が観察された。韓国語の疑似親族名称による呼びかけ表現は、相手への親近感を示すことにより人間関係における距離を縮めるポジティブ・ボライトネスの機能を持つと指摘されている(林焯情・玉岡, 2009; 元知恩, 2018)。初対面場面において、日本語と韓国語では呼びかけ表現の使用方略が異なると言える。

これらの特徴は、双方の言語教育で重要な知識である。接触場面において、それぞれの言語話者の呼びかけ表現の使用におけるすれ違いが予測されるからである。呼びかけ表現を避けようとする日本人韓国語学習者は、韓国語母語話者に親密さを伝達することができないだろう。一方、呼びかけ表現の使用を避けない韓国人日本語学習者は、母語でのストラテジーを日本語に応用する場合、親密さを伝える意図が裏目に出て相手に違和感を覚えさせることになる。이영주(2010)は日韓の呼称をそれぞれ直訳して呼ぶことは違和感を生じさせる恐れがあると指摘する。しかし、「何と呼ぶか」だけでなくそもそも「呼ぶか呼ばないか」、そして「いつ呼ぶか」という選択も言語によって異なるため注意を要することが、本稿の観察から示されるだろう。

i 呼びかけ表現には呼称語(Vocative)と言及語(Reference)を含む。

ii 本稿は、呼びかけ語の使用総数に着目して統計的分析をするのではなく、呼びかけ語の使用状況や方略が異なることを示すために質的分析を目指すものである。

iii 本稿では、日韓の言語行動の相違を明らかにすることを目的にしたが、その過程で韓国語会話においては男女差があるようにも見られる。その理由は、韓国人男性同士の全ての会話で聞き手との基本的スピーチレベルも普通体に変化させなかったことと関連すると推察される。このようなことから、スピーチレベルと呼びかけ表現は密接に関係があると考えられるが、本稿ではこれ以上触れない。

6. おわりに

本稿は、日本人大学生と韓国人大学生の初対面会話場面における呼びかけ表現について、いかに決定し、いつどのように用いるかという言語行動を対照分析した。韓国語会話では主に上下の明示の確認によって呼びかけ表現を用いるのに対し、日本語会話では上下と名前の確認はあっても呼びかけ表現が回避される傾向が分かった。韓国語の呼びかけ表現が担っている親密さの表出という機能を日本語ではどのような表現が担っているかを分析することは、今後の課題である。

参考文献

- 이영주 (2010) 「한일양국의 2인칭 호칭 사용 실태—대학생 간의 호칭을 중심으로— (韓日兩國の2人称呼稱使用實態—大学生同士の呼稱を中心に—)」 『日本語教育』 52: 111-127. 한국일본어교육학회.
- 林炫情・玉岡賀津雄 (2009) 「韓國人大學生の先輩に対する「親族名稱」と「実名」の使用に関する適切度を決める諸要因」 『ことばの科学』 22: 137-149. 名古屋大学言語文化研究会.
- 元知恩 (2018) 「日韓のテレビ・ドラマに用いられた呼びかけ表現—ポジティブ・ポライトネスの観点から—」 『日語日文学』 79: 125-141. 대한일어일문학회.
- 吳惠卿 (2013) 「韓國語談話における呼稱語の役割: 話者の談話管理を中心に」 『教育研究』 55: 157-171. 國際基督教大學.
- 奥山洋子 (2004) 『이렇게 다르다! 한국인과 일본인의 첫 만남의 대화: 부록 한일양국의 남녀 대학생 42쌍의 첫 만남의 대화 (40분간) 오쿠야마요오코/이즈미지 하루자료 (こんなに違う! 韓国人と日本人の初対面の会話: 付録 韓日兩國の男女大学生42組の初対面の会話 (40分間) 奥山洋子/泉千春資料)』 보고서.
- 韓娥凜 (2017) 「日韓の政治談話における「呼びかけ」の使用傾向と談話機能」 『일본어학연구』 52: 121-134. 한국일본어학회.
- 東出朋 (2020) 「初級段階の日本語教育における呼びかけ語」 松村瑞子・山崎和夫・因京子 (編) 『語用論研究の可能性』 487-495. 朝日出版社.
- 洪珉杓 (1997) 「韓日兩國呼稱의 社會言語學的 考察—大學生들의 呼稱使用을 中心으로— (韓日兩國呼稱의 社會言語學的 考察—大學生의 呼稱使用을 中心으로—)」 『日語日文學研究』 30: 481-505. 한국일어일문학회.
- 水谷信子 (2015) 『感じのよい英語 感じのよい日本語—日英比較コミュニケーションの文法—』 くろしお出版.
- 水野マリ子 (1999) 「談話における呼稱の機能」 『神戸大学留学生センター紀要』 6: 65-80. 神戸大学.
- 尹秀美 (2007) 「呼びかけ表現の使用パタンの日韓比較: インターネットサイト上のメッセージを例に」 『金沢大学経済学部社会言語学演習』 3: 37-62. 金沢大学.
- 尹秀美 (2008) 「呼びかけ表現を好む韓国人、呼びかけ表現を避ける日本人: コンテキスト化の合図という観点から」 『韓國語學年報』 4: 21-31. 神田外國語大學韓國語學會.
- 劉寧 (2016) 「日本人大学生の呼稱使用について—上下・親疎・性差が及ぼす影響—」 『東北大学言語学論集』 24: 129-140. 東北大学.

We use a choice of invocation when we first call a listener. The choice of what to call the listener is often decided in the first face-to-face conversation where the relationship with the listener begins, and the participants in the conversation usually decide the invocation after confirming information about the listener such as name and age. This paper presents a contrastive analysis of the linguistic behavior of Japanese and Korean university students in determining the listener's invocation in a first-meeting conversation, and when and how they use it. It was found that in Korean conversations, calling out was mainly used by explicitly confirming seniority, while in Japanese conversations, calling out tended to be avoided even though seniority and names were confirmed. In contact situations, differences in the use of invocations by speakers of each language can be expected.